

# インフルエンザにかかる

この一年、いわゆる新型インフルエンザで大変であった。

さて、インフルエンザ、どんな動詞をお使いですか。——「インフルエンザになる? かかる?…」

風邪もインフルエンザも症状は似ているが、病気としては全く違うという面白いことに動詞も違う。風邪なら「ひく」だけれど、「インフルエンザをひく」とはあまり言わない。意外に日本語は科学的だ。

病気について使う動詞で最も一般的なものは、「なる」だ。いわば病気を一つの「状態」ととらえ、それへの変化を言うのである。「肺炎、水虫、胃潰瘍、鬱病、がん」「下痢、便秘」など、ほとんどの病気や症状について使える。

「老眼」も使えるし、「元氣」まで「なる」を使う。ただし、「頭痛」「寒氣」「めまい」など感覚症状には使わない。

さて、「インフルエンザになる」のインターネット上の使用数を検索で調べると、約三六〇万件だった(文字列のみ。グーグルのフレーズ検索。本年三月)。やはり一番多い。

さて、「患<sup>わづ</sup>う」はどうだろう。「煩<sup>わづ</sup>う」と同じ語源で、ちよつと古い言葉でもある。インフルエンザについてはあまり言わないようである。ちなみに「インフルエンザを患<sup>わづ</sup>う」の検索件数は約二万件あまりであった。

では、最後に「罹<sup>か</sup>る」はどうか。典型的には病原性の「病氣」について用いるようで、「下痢、便秘」などの症

状には言わない。「頭痛」などの感覚にも言わない。本来、「わなにかかる」のような、あるものの影響下になるということを表すからだろう。ちなみに「インフルエンザに罹<sup>か</sup>る」の検索件数は約三三万件、平仮名表記の場合は約五一万件あまりであった。

ところで、インフルエンザにかかったらどうするか。「お医者さんにかかる」ことになる。なんと、「お医者さん」も「インフルエンザ」も日本語では同類だ! 助詞の使い方は違つが、「医療費」も「かかる」。そう、病気になる<sup>か</sup>とえらいことになる。ご自愛くださいね。

京都教育大学教授

森山卓郎